hasegawa shiro

長谷川四郎作品集　第3巻

昭和42年2月25日初版発行
定　価　900円

著　者　長谷川四郎
発行者　中村　勝哉
装　幀　長谷川元吉
発行所　株式会社　晶文社

東京都千代田区外神田2－1－4
電話（253）2093
振替　東京62799

印刷　第一印刷株式会社
製本　橋本製本所
● ©1967<検印廃止>落丁・乱丁はお取替えいたします

長谷川四郎作品集／3

JSC

hasegawa shiro

三つの話

7——程富山

59——大頭

96——背信湾の人質

解説　佐々木基一

ベルリン一九六〇

ポートサイドにて——137

家具の年齢——154

夜中から朝まで——179

反共主義——203

土曜日の夜の鐘——231

ハンス・ガイツケ——263

ベルリン一九六〇補遺——281

目下旧聞篇

目下旧聞篇——301

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

●第三巻に入っているのは
1959年実業之日本社刊の『トロワ・コント』と，
1961年勁草書房刊の『ベルリン物語』と，
1963年未来社刊の『目下旧聞篇』の
三つの文集である。
●第一巻と
第二巻では，
はぶいてしまった文章があったが，
この第三巻には
ぜんぶいれた。そればかりでなく，
単行本の時には入っていないものも
いれた。
ベルリン1960補遺がそれで，
その一つ『ベルリンのNHKシンフォニー』は
1961年，
記録芸術の会編集の「現代芸術」（勁草書房）５・６月号に
のせたもので，
『ポンド族』は
1962年，
「現代の眼」８月号にのせたものである。
また，
『トロワ・コント』を『三つの話』と，
『ベルリン物語』を『ベルリン1960』と
それぞれ
題を変え，
『ベルリン物語』の中の間違った個所を
訂正した。
それは
ピークをグロテヴォールと間違えた個所である。
1967年１月――――――――作者

三つの話

程富山

睡眠中の出来事

ひとびとよ、たちあがれ、日本軍をやっつけろ、と書いたビラが方々にはりだされていた。そのころ、河北省西南の一部落に国民党軍の一個中隊が駐屯していた。駐屯といっても、兵舎があるわけではなく、兵隊たちは民家に散宿していた。ある日、隊長ならびに幕僚が陣取っている、部落でいちばん大きな家へ、ひとりの老いたる百姓が近づいてきて、門前に突立っている銃剣附きの番兵に叩頭して、こう言った。

——この子を兵隊にしてやって下せえまし。

番兵はうろんな眼附きで、この唐突な篤志家を見た。そして

——この子って、だれかね？

と、こう反問したが、それというのも、そのあたりには子供の姿らしいものは一つも見えなかったからである。すると、老父はうしろに手をまわして、黒いだぶだぶの長衣のかげから、ひとりの男の子を無理にひっぱり出し、番兵の眼前に据え、両手でその小さな肩をおさえつけた。番兵は呵々とばかり笑った。

——あんまり小さすぎるね。

相手はニコリともしなかった。そして

――いまに大きくなりますぞ。
と主張して、いっかな立去ろうとはしなかった。
この老百姓の確信と熱誠が、たぶん、たまたま奥座敷から中庭へ出てきた隊長の耳にはいり、その心をうごかしたからだろう、小さな程富山はその時以来、軍隊に編入されてしまった。老父はそこばくの金品をうけとると、程富山に黒いがさがさの大きな手を幾度も振って、部落のはずれにある土小屋へ帰っていった。
一方、そのころ、獲鹿という町に日本軍の一部隊が駐屯していた。獲鹿は小さな町だったが、孔子様以来の由緒ある地名で、古い城壁にかこまれ、典型的な県城のもつ要約をそなえていた。城壁の門には観音開きの大きな分厚い木の扉がついており、それが夜はとざされ、昼はひらかれていた。この門から城内へはいると、そのすぐ右側に高い望楼が立っており、その地階には、赤いフサのついたホコだとか筒先から弾丸をこめる火縄銃だとか、およそ博物館的な歴代の武器が雑然と埃をかぶってつみかさなり、この地階から木の梯子をつたわって登ってゆくと、てっぺんには日本の兵隊が、例のおなじみの恰好で、三八式銃をかかえ、城内・城外をへいげいして、立っていた。ある日のこと、この兵隊がいつものようにそこから城外を眺めたり城内を見おろしたりしていると、城内の道路をひとりの女がびっこをひきひき歩いているのが眼にはいった。その女は、日本軍がここへやってきてから間もなく、淋病にかかって、かくの如くびっこをひくようになったのであった。
――やい、やい、なにを見ておるか、この助平野郎、と下の衛兵司令の軍曹殿から気合いがかかった。
そこで兵隊は眼を転じて城外を見渡した。そこには広々とした畑と、ところどころの人家と、井戸から水をくんでいる驢馬と、耕作している人間とが見えたが、ちょうどそのとき、この風景の中をもうもうと土埃をあげて、一台のトラックがこちらへ近づいてきたのであった。友軍のトラックではあった。それは見る見る近づいて、門から急カーヴで城内へはいったとたんに、ぴたりと停止した。望楼の上の兵隊からは見えたが、そのからっぽのトラックには、ちっぽけな人間がひとり横倒しに積まれていた。トラックの側板ががたりとおろされ、その荷物はひきずりおろされた。
――ぶちこんでおけ、と衛兵司令が言った。
ひきずりおろされた人間は、一見して、だぶだぶの兵隊服を着た少年であって、手をうしろにまわし、縄でしばられていた。この人間はひきたてられ、抵抗もしなかったが、それが犬のようにひっぱられ、つれ去られていった。
――やい、やい、やい、と日本兵がからかい半分に銃の

台尻で少年のお尻をたたいた。

解放戦士についての話なら別だが、以前の中国では、よい鉄は釘にならぬ、よい人間は兵隊にならぬ、と町や村のひとびとがよく言い、日本の兵隊もその口真似をしたものだったが、しかし、いわゆる社会的観点からするならば、もちろん、そうとばかりは言えないことだった。これまたよく言われたことだが、没有法子（メイヨーファーツー）という事情もあったわけである。かの程富山の場合がそれであった。それに、かれは、兵隊服を着せられたというだけで、厳密な意味では兵隊でなかったのである。「これだって引金はひけるぞ」と日本軍のひとびとが言ったけれども。

さて、老父の手から国民党軍の手へとわたされた程富山は、官給品の兵隊服の、いちばん小さいのを着せられて、裾や袖をまくりあげ、まだまだ大きくなるには間があったので、暫定処置として、中隊命令により、隊長附きの従卒という任務につけられたのだった。こうしてかれは、影の形にそうごとく、隊長のぐるりにつきそって、芝居の主役につきまとう黒子（くろご）の役をつとめることになった。程富山はちょこまかとたちはたらいた。こうして、はやくも三日たった。その日、程富山がハタキをかけながら窓を見ると、幕僚たちが中庭にあつまって、机をかこんで首をつきあわせ、なにやらひそひそ話しあっていた。それには隊長も加わっていた。幕僚たちは立ちあがった。隊長も立ちあがった。幕僚たちはぱっと手をあげて、隊長に敬礼した。

――出発！　と隊長が言った。

気候は不順だった。昨日は寒かった。きょうはいきなり夏のさかりがきたように暑かった。あたりが急にざわついてきた。日がかんかん照って、程富山はちょこまかとたちはたらいた。部落の道路にはすでに兵隊たちが長い行列を作ってならんでいた。隊長は白いずんぐりした馬に、幕僚たちは黒いずんぐりした馬にまたがって、部隊の先頭に立った。行軍が開始された。程富山は徒歩で、隊長の馬の脚とならんで歩いていった。部落を出はずれるとき、かれは自分の家の前を通ったのだが、そこにはだれもいなかった。日光にむかって開かれた戸口からは内部の闇がみえるだけだった。父親も母親もはたらきに出ていたからである。長い日照りつづきで、道路にはもうもうと土埃がまいあがった。平坦な土地だった。うすよごれた羊のいる野原と、畑と、点在する人家と、まばらな林と、はたらいている人影があちこちに見えたが、道路でゆきあう人はひとりもいなかった。道路はまるで軍隊専用路になったようだった。部隊は途中、小さな村で小休止をしただけで、行軍をつづけた。風景はいずこも同じようなものだった。風がざわめいて、程富山は風と馬と自分のたてる土埃にまみれ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

隈取りしたような顔で歩いていった。それは十里の強行軍だった。どこへ、そして、なんのために？

――ボーイ、水もってこい、と隊長は三十分に一回くらい命令した。

そのたびに程富山は民家へはいったり、野原をかけまわったりして、水をさがさなくてはならなかった。そんなとき、少し遠くの方から見ると、部隊はみずからのたてる土埃のため、足のほうがみえず、兵隊たちの頭と馬と将校たちの上半身が見えるだけだった。こうして進むにつれて、頭上の太陽はうしろの方へ移動した。そして夕方近く、風はぴたりとしずまってしまった。静かな入日時だった。行軍の先頭はちょうど小高い岡の上にきていた。

隊長が右手をあげて、停止の命令を発し、命令はこだまのように、分隊から分隊へ伝達された。つづいて、休息の命令がつたわった。兵隊たちは前の方から順々に列をとき、道路の両側に腰をおろして休んだ。馬に乗った将校たちが進みでて、隊長の馬と馬首をならべて立った。すると、かれらの眼下に小さく、一つの村がうずくまっているのが見えてきた。その村は平地にかこまれ、その平地が低くつらなる岡にかこまれ、ちょうどうしろの岡に沈みかけた太陽に、低くくすんだ屋根屋根をあかあかと照らされているのだった。風日ののち、大気はおだやかになごんでいた。

――隊長、こういう光景に接しますと、命令一下、村を襲撃したくなりますな、と副官は言い、隊長はうす笑いを浮べていた。

岡をくだって、一本の道が村へ通じていた。出発用意の命令が下されて、一行は服や装備の土埃をはらった。それからきちんと整列して、ラッパ手がラッパを口にあてた。こうして歩調をそろえ、ラッパを吹きならしながら、部隊は岡をくだっていった。日が背後にかげった。すでに遠くから、村の入口に一群のひとびとが立っているのがみえていた。近づくにつれて、程富山にははじめて、それが青天白日旗をかかげた出むかえの人たちであることがわかった。隊長は先頭にたって、その人たちの前までくると、馬をとめ、またもや片手をあげて、停止の命令を発した。ラッパはやみ、一同は停止してしーんとなった。歓迎陣のなかから、村長とおぼしき人物が進み出て、大きな紙をひろげ、なにやら読みあげた。隊長は馬上から挙手の答礼をして、再び前進、部隊は日没とともに村の中へはいっていった。

その夜は月もなく星もなく大そう暗かった。夜とともに風がまた吹きおこってきて、畑や木々にざわめいた。村の家々は早くから灯を消して、暗くひそまりかえっていた。

兵隊たちは村の小学校に宿営し、校庭には幕舎が張られ、あかあかと大きな焚火がもやされた。そのあたり、兵隊たちの影法師がおそくまで右往左往していた。やがて焚火も影法師も消えてしまった。全村が睡眠中であって、ただ暗黒の中に歩哨が立っているだけだった。風がざわめいた。

隊長とその幕僚はここでも村いちばん大きな家にとまりこんだ。村の名士たちが次々とやってきて、かれらに挨拶した。かれらはありたけの歓待をうけた。家の主人がみずから台所にあらわれて、料理の采配をふるった。それは禿げ頭のずんぐりした旦那であって、手には数珠をはめ、クルミの実を二つ掌の中にからからいわせ、やい、とか、こら、とか程富山を呼び、さかんにこきつかった。程富山は給仕となって、台所と客間のあいだを往来し、中庭を歩きまわった。布製のひらべったいぼろ靴をはき、音もなく歩きまわった。十里の行軍に加えて、かれはさらに四里くらい歩いた。客間では隊長と幕僚たちがさかんに飲んだり食ったりした。村でいちばん最後まで灯がともっていたのはここだった。

宴会がすんだ。程富山は台所で残りものを腹につめこむと、あてがわれた納屋へいって、その隅っこにまるくなって寝た。日中は暑かったが、夜は冷えた。納屋の中には空っぽの麻袋がたくさんあった。程富山はそれを頭からひっかぶった。あたたかく気持がよかった。かれはすぐさまぐっすり眠ってしまった。それは深い眠りだった。世界が破裂しても眼をさまさないだろうと思われるほど、深い眠りだった。

いつもなら程富山は鞭かなにかでぴしりと叩きおこされたものだった。しかし、その日のかれは自然と眼をさましたのである。かれは夢もなく軽く集中的に一気に眠った。その眼覚めは、どこか高いところに浮んでいたのが、すーとおりてきて、地面にふわりとついたような工合だった。神、眠りを作りたまえり。疲労はすっかり体内からぬけ出してしまっていた。納屋の中はすでに明るく、古ぼけた褐色の障子窓から日光が射しこんでいた。がらんとした納屋に、うっすらと穀物の匂いがしていた。程富山は両手を後頭部にあて、麻袋のうえに気持よく仰向けになって、眼をひらいたり、とざしたりしていた。かつてかれが羊の番をしていたとき、かれは草原にねころがって、このように眼をひらいたり、とざしたりして、遊んだものだった。眼をひらくと青空がみえ、眼をとざすと赤い血の光がみえたものだった。ここではしかし、眼をひらくとススけた灰色の天井、眼をとざすと体内の暗黒しか見えなかった。こうやってかれはぼんやりしながら、それでもほとんど本能的に、自分の名前が今にも呼ばれるかと、待っていたのであ

る。あるいは、納屋の戸がいきなりひらかれて、見覚えのある兵隊が入ってくるのを待っていたのである。しかし奇妙なことに、いつまでも名前は呼ばれなかったし、戸もひらかれなかった。あたりはひっそりしていた。空白の時間が流れた。こうしてついに切迫した空腹を感じたかれは、がたびしの戸をみずから押しひらき、中庭へ出ていったのである。

まだ寝ぼけているかれの眼に、おそい朝の太陽の光が射しこんで、まるで眼帯をはずした眼におけるごとく、世界はまぶしく見えた。その光の中で、かれは一個の異様なものをみた。いや、それは機関銃であって、ことさら異様なものでもなんでもなかった。けれども、昨夜はここに機関銃などおいてなかったのである。それが一夜のうちにそこに現われて、そして急にむくむくと肥ったかのように思われた。というのは、その機関銃は、程富山がそれまでにそばから見たことのあるチェッコ式とちがい、全体に重々しくどっしりしていたからであった。そしてその銃口を、街路に面してひらかれた門の方へ向けていた。門からは村の道がみえたが、そこには、人ひとり通っていなかった。中庭にもだれもいなかった。客間の中から男たちの低い話声がきこえるだけだった。そこで、程富山は台所へゆくべく、中庭をよこぎっていった。かれは機関銃を迂回して、そのそばを通るとき立ちどまり、しばしそれを眺めた。あたかも農夫が、鋤は鋤でも、異民族の使う鋤を、めずらしげに眺めるように。それから昨夜の台所の方へいこうとしたときである。正面の母屋の戸のひらく音が背後でした。そしてそこから軍服を着た二人の男がでてきたのである。程富山は不動の姿勢になった。と同時に、たちまち、それは恐怖の姿勢になった。二人はつかつかとかれのそばへやってきた。きいたことのない、いわゆる南蛮鴃舌(げきぜつ)がかれの耳にぶきみにがんがんひびいた。

〈日本人〉だと声には出ず、程富山の頭の中で、言葉が実物とぴたりとであった。

それと同時に、一瞬、かれの脳細胞はポスターの極彩色を反射した。それは生れた村のかれの土小屋の壁にまで貼られていたものだった。一列の日本兵が銃剣をならべ、女や子供を殺しつつある、不器用な絵だった。程富山は逃げようとしたが、一瞬、足がすくんでしまった。一方、二人の男はもうかれの両側にきて、ぴたりと立っていたのである。突然現われた、見知らぬ、奇妙に柔らかな手によって両肩をおさえつけられた。突然の恐怖が去ると、程富山はこんどは、捕えられた小さな臆病な野獣のような顔になった。そして、すきあらば逃げようと、両側の男の顔をうかがった。しかし、今やかれの足はうごいたのだが、いかん

せん、かれの両肩はますます強くおさえつけられていた。そして奇妙な、こっけいな、どもりの言葉がきこえてきた。

——コ、コ、コ、コドモ、バ、バ、バ、バカヤロ、とそれは言っていた。

一夜のうちに完全なる編制替えがおこなわれたようだった。かれの隊は消えてしまい、程富山ひとりだけ、未知の世界に遺棄されてしまったのである。そして両側からかれをつかまえている二人の男、ぶしょう髯をはやし、日にやけた二人の小男が、かれのあらゆる運命を握っているのだった。程富山は自分の脚に巨大な日本刀がぶつかっているのを感じた。そのとき、母屋からこの家の主人である昨夜の旦那がでてきた。それは昨夜と少しも変っていない顔附きをしていた。程富山はやや安堵した。かれは迷子だったのだ。そして今や発見されたのである。この旦那は救い船ではなかったか？　程富山の眼はぴかぴかと光り、SOSを発して、旦那の顔をみた。けれども、この旦那は程富山をぜんぜんみとめなかった。そしてただ、こう言っただけだった。

——そいつはボーイですよ、どうやら、逃げおくれたらしいですな。

——なるほど、なるほど、と奇妙な、こっけいな調子の言葉がきこえた。

——どうしますかね、と家の主人が言った。

一瞬、あたりはしずまりかえった。

——助けて下さい、と程富山はありたけの声で言ったが、三人はぜんぜんきこえないようだった。

二人の日本人は二言三言なにやら話しあった。それから、一人が程富山の顔をみた。それはにらみつけているようでもあれば、微笑をうかべてみせているようでもあった。からかっているようでもあれば、怒っているようでもあった。そして、その口からは次のような言葉がでてきたのである。それは程富山のきいたことのある文句だったが、暗誦でもするように、たどたどしく、こう言っていた。

——一銭でもカネだ、拾っておけ。

これが自分とどう関係あるか、程富山にはわからなかった。だが、事実において、かれはもう手をうしろにまわされ、縄でしばられていた。或いはこれから畑のむこうの野原へつれてゆかれ、そこで銃殺されるのかもしれなかった。早くも頭の中がガーンと鳴った。うしろからぐいと押された。門の外へ出た。空トラックに乗せられた。かれは犬のようにつながれ、横倒しにされた。トラックがうごきだした。今や村の道路には幾人かの男女が歩いていた。か

れらはトラックをみたが、それには何も積まれておらず、からっぽのようにみえた。トラックはスピードを増し、ついにはフルスピードで、たんたんとした街道を突進していった……

側板ががたりとおろされて、程富山がトラックからひきずりおろされたとき、かれはもう城門の中へはいっていて、生れてはじめて町というものを見たのだった。かれは、村の道とべつに変りもないでこぼこ道が、かすかにのぼり気味になってついているのを見た。かれはそれ以上入れなかったが、それを少しゆくと水平になり、そこには両側に鍛冶屋、農具屋、綿布屋、雑貨屋、質屋などがならんでいるのだった。しばらくゆくと、道路は四辻になっていて、そこを曲って横町へはいると、そこにはもういかなる商店もなく、小さな低い住居がならんでいるのだった。それからさらに路地へはいりこんでゆくと、突如としてそこに、すこしばかりの西洋風を加味した地主の邸の二階建が煉瓦塀と広い庭園にかこまれて立っているのだった。そしてどの道路もその行きどまりに灰色の古ぼけた城壁の内側をみせ、遠近法をさえぎっているのだった。けれども程富山はこの町の中をひきまわされたりしなかった。かれは道路の奥に城壁が立っていて、その上に青空がひろがっているのを、ちらりと見ただけだった。そして直ちに、城壁内の城壁の中へいれられ、そこからさらに、煉瓦塀にとざされた狭い中庭へおしこまれたのである。というのは、獲鹿に新設された監獄は、城壁内の城壁である役場の構内へ入って、すぐその両側にあったからである。左側が男の、右側が女の監獄であった。

ところで、歴代の県城支配者によって占拠されてきたこの役場は、城門をはいった左側、というのはつまり望楼とむかいあったところにあって、城壁とおなじような古びた灰色の煉瓦にかこまれ、必要に応じて、その緑色の門を開いたり閉ざしたりしていた。おりしも、カーキー色の乗用車がこの門前にとまっていた。この門から構内へはいると、石だたみの通路が一直線に奥の方へ通じて、この奥には幾段かの石の階段があり、この石段によって少し高くなったところに、黒ずんだ陰気な家が立っていた。これが役場の建物だった。程富山は今やこの役場の構内へいれられつつあったのである。

早くも真夏がおとずれたような暑い日であって、石だたみの通路には日が白くかんかん照りつけ、かげろうが立って、石だたみはことさら白く、奥の役場の建物はことさら陰気に黒ずんでみえた。おりしも、この暗い役場の中からふたりの男があらわれてきた。ひとりは灰色のぺらぺらの中国服に、灰色のヘルメットをかぶり、白い靴下に黒い革

の短靴をはき、扇子を手にもっていた。これは新民会宣撫班長の肩書をもつ日本人だった。もうひとりはカーキー色の軍服に赤い革の長靴をはき、白い垂れのついた戦闘帽をかぶり、日本刀をひっさげていた。これは獲鹿駐屯軍の小笠原部隊長だった。二人共、同じくらい背が低かったが、宣撫班長はまるまる肥っており、部隊長はその半分くらい痩せていた。二人はならんで石段をおり、石だたみの通路の上を門の方へ歩いてきた。門の外には例のカーキー色の自動車がかれらを要務のため鉄道沿線の石家荘へはこんでゆくべく待っていたのである。

——どうです、ここの生活は、すこしはお気にめしましたかな、と宣撫班長が扇子をぱちぱちやりながら、こう言った。

小笠原部隊がこの獲鹿にきてから半年にもなるのだが、宣撫班長は部隊長にこのような口のきき方をした。宣撫班長が石家荘の町に住んで、夜ともなると、日本渡来の料亭・カフェーのたぐいで酒をのんだりしていたのに対し、部隊長はいっこうそういう遊びはせず、退屈していたからである。宣撫班長は、きょうはこのいささか石部金吉的な部隊長と石家荘へいったついでに、かれを遊廓へつれていってやろうと思っていたのだった。

——いや、どうもわしにはこういう生活はのんきすぎてむきませんわ、と小笠原部隊長が言った。

——ヒニクのタンですかな。

——まあ、そんなところでしょう、あなたにはごくろうだが。

——なに、遠慮なさるにはおよびませんよ、ゆっくり静養なさるんですな。

宣撫班長はこう言って笑った。その笑いは相手にむかって、「よく知ってるくせに」と言っているような笑いだった。というのは、かれもまた、べつになんにもしていなかったからである。自動車で獲鹿へやってきて、宣撫班員たちと一しょに、関東州生れの通訳つきで、路傍でおきまりの演説をやったり、ビラをべたべたと家々にはりつけたりするほか、なんにもすることがなかったのだ。そして宴会だけは事欠かなかった。宣撫班員の連中は獲鹿の城内のがらんとした空家に住み、夜になるとローソクを立てて、酒をのみ、高歌放吟していた。身に寸鉄をおびず、などとかれらは豪語したものだが、実はモーゼル銃を寝台の下にかくしていた。しかし、夜々は暗く、しずかなものだった。そこで宣撫班長は笑ったのだったが、この笑いは部隊長には通じなかった。かれは矛盾らしいものは少しも意識しない生れつきだったのである。

——立っておる必要のないときは、坐っておれ、とかい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.